

一位 ファンスニョン 42歳 女性 大韓民国
オリンピック開催は東京が完全無煙都市になるチャンス

私は今まで約42年間、韓国ソウルで過ごし、今年の4月に埼玉県に引っ越ししてきました。日本という国で暮らしてみても驚いたことが二つあります。まずは、街にゴミが少なく非常に綺麗なことです。日本の街が綺麗だということは、日本に来る前から見聞きすることが多かったため、頭では理解していましたが、実際に来てみて街にゴミがないということがこんなにも気持ち良いことなのかと実感させられました。ポイ捨てをする人もなく街が綺麗に保たれているのは、住民の意識の高さを物語っていると大変羨ましく思いました。恥ずかしながら、我が韓国では路上や公共の乗り物の中でのポイ捨ては日常茶飯事ですし、繁華街では店の広告物を地面に撒いて通行人の目につかせるといふ、日本の方から見れば考えられないような集客方法も使われています。

もう一つ驚いたのは、そうした快適さとは正反対に、飲食店が大変タバコ臭いということです。ファミリーレストラン等にいまだに喫煙席があること自体が驚きですが、さらにその喫煙席が壁やドアさえない開かれたところにあるという、分煙すら行われていないに等しい店も多く見られます。ファミリーレストランとは、その名のとおり子連れの家族がやって来ることを想定しているはずですが、そんな場所で何故このような状態なのか理解に苦しみます。外食費が高い日本にあって、ファミリーレストランは比較的安価に美味しい食事を楽しめる場所で、3歳になる娘もファミリーレストランが好きなのですが、如何せんタバコ臭い店が多くてたまりません。娘にもよくないと思って、つつい足が遠のいてしまいます。近所にある店の場合、店側がタバコの煙に対してどのような対策を講じているのかを基準に行く店と行かない店を決めています。店に着いてからも喫煙席からなるべく離れた席をリクエストし、空席待ちの時は、席が空いても喫煙席のすぐ側なら辞退するようにしています。

先日、安価なモーニングセットが話題の某有名コーヒーショップチェーンに行った時も、入ってすぐ右側に仕切りもない喫煙席があつて、店に入った瞬間猛烈なタバコの臭気に襲われました。私一人だったなら間違いなく店を出たでしょうが、その時は夫の家族と一緒にだったので仕方なくそこで食事をとりました。当然、味など全く分からないほどひたすら不快、煙のせいで目まで痛くなる始末で、一刻も早く娘をこの汚れた空気から救い出したいという気持ちでいっぱいでした。

日本の飲食店が大変タバコ臭いのに対し、韓国の飲食店はタバコの煙とは完全に縁を切りました。もちろん、かつては韓国にも嫌煙家にとっては食事を楽しむこともままならぬほど煙たい飲食店がたくさんありました。特に飲酒を前提とするような店では喫煙は当たり前のように横行しており、そういうところに30分でも滞在すると、髪や服に頭が重くなるようなタバコの臭いが染み付いて、家に帰るとすぐにシャワーを浴び、服には消臭スプレーを噴霧したものでした。しかし、そんな韓国の飲食店からタバコの煙が消えたのです。その歩みは最初はゆっくりとしたものでしたが、ここ数年で一気に歩みを速め、決して後戻りできないほどに快適な飲食環境が作られました。その流れを簡単に紹介したいと思います。

まず、韓国では1995年に国民健康増進法が施行され、禁煙政策が始まりました。とはいえ、当時はまだ喫煙者天国だった韓国の話です。官公署に禁煙施設を設けることと、中高生に対して喫煙の害悪についての指導を行うという程度の、今から見れば信じられないぐらいの弱い政策でした。しかし、最初の一步は小さくはありましたが、その歩みは確実に進んでいき、韓国内の禁煙運動は段階的に進んできました。飲食店で禁煙席と喫煙席を分ける動きも起こりましたが、それも当初はついたてを隔てただけの分煙に何の意味があるのかという批判を受けていました。ちょうど今の日本の状況と一脈相通じるところがあるかと思います。しかし、ついに韓国政府は2013年7月1日から飲食店における全面禁煙の実施に踏み切りました。全面禁煙は、まず面積が150㎡以上の店に義務付けられました（ただし、この時点で1年半後からは、規模による例外措置は撤廃されることが予告されていました）。喫煙した場合は10万ウォン（日本円にすると1万円弱）の過料が課せられることになりました。この時、愛煙家は小規模飲食店に、嫌煙家は大規模飲食店に行くという、以前より実質的な意味での分煙がなされました。言うまでもないことですが、これは個人経営の小規模飲食店よりも経営基盤のしっかりしたチェーン店等の大規模飲食店に対して社会的貢献をより強く求めた結果としての段階的禁煙導入でした。私たちはこの時点で既に全面禁煙の店のみを利用する生活に変わっていましたが、3年以上前から飲食店内でタバコの煙にさらされることはなかったこととなります。そして、前述のとおり2015年の1月からは面積に関係なく全ての飲食店で全面禁煙が義務付けられました。

韓国民は、日本に対して複雑な感情を抱きつつも、常に日本を意識してきました。昔から「日本で起こったことは20年後に必ず韓国でも起こる」と言われ

たように、韓国民は日本に追いつけ追い越せという気概を持って走ってきたようなところがあります。しかし、こと禁煙に関しては、失礼ながら日本は世界的に見ても遅れていると申し上げざるを得ません。今年5月に世界保健機関が発表したところによると、男性の喫煙率は日本が33.7%、韓国が49.8%ですから、全面禁煙への喫煙者の拒絶反応は韓国のほうが強いはずなのですが、実際にはより喫煙者が少ない日本において禁煙政策が実を結んでいません。あるいはお客様の便宜が最優先されるという日本的サービス業文化が強力な禁煙政策を妨げているのかもしれませんが。

折しも、2016年9月4日に韓国の京郷新聞インターネット版に「喫煙者天国でオリンピックを開催するつもりなのか」という見出しの記事が掲載されました。そこには、「東京の受動喫煙対策は世界最低レベルとの批判を受けている」といった衝撃的な内容がありました。また「近年のオリンピックの開催都市で、飲食店や宿泊施設でタバコの煙にさらされるのは東京だけ」だという、私も常々不快に感じていたことが指摘されていました。さらには舛添前都知事が在任時に禁煙条例の制定に着手しようとしたものの、都議会から飲食店側の自主性に任せるべきだと反対されて条例制定が頓挫したとも紹介されていました。

小池百合子知事は喫煙を規制する条例の制定に意欲を見せているといいます。かつ、小池知事は何かと闇が多いとされる都議会との対決姿勢も示しているので、今度ばかりは都議会の圧力に屈することなく禁煙条例を制定していただけるものと期待しています。都議会のいうように飲食店側の自主性に任せるというのでは、お客様の便宜を再優先する飲食店の経営者が全面禁煙に踏み切るなど望むべくもありません。このケースでは行政の側から強制的にはたらきかけることをしなければ事態が進まないと思います。そして、東京で禁煙条例が制定されれば、それは全国に波及することがほぼ確実視されるので、全国で禁煙条例が制定されていくこととなるでしょう。

「おもてなし」という言葉を前面に打ち出してオリンピック開催の機会を勝ち取った東京、そして観光立国という政策を掲げる日本において、世界中の人々にタバコを煙を嗅がせている現状が是正されなくてもよいのでしょうか。オリンピックの開催というのは東京都が完全無煙都市になる千載一遇のチャンスです。どうかこの機会を無駄にせず、世界の尊敬を集める国に相応しい対応をお願い申し上げます。